

第 10 回
ウィリアム・モリス研究会
発表要旨

発表1

労働の喜びの表現としての芸術

モ里斯から現代まで

高安啓介（大阪大学大学院）

ウィリアム・モ里斯は、芸術を「労働の喜びの表現」と定義した。そこでいう芸術は、鑑賞のために作られた美術品ではなく、職人の手による工芸品であり、生活を彩る日常の品々である。モ里斯は美しい装飾を世に送り出したデザイナーとして知られるが、かれはまた社会活動家として、労働者がもの作り手としての誇りを取り戻し、ものづくりに喜びを覚えるようになるべきだと唱えて回った。なぜなら、ものを生み出す労働の喜ばしさこそ、生み出される品々の美しさを決めると考えていたからである。モ里斯は、デザイナーが美しい装飾を描いてみせることで、職人がそれを喜んで生み出そうと思うだけでなく、職人が喜びを覚えながら仕事をしてはじめて、芸術と呼ぶに相応しい、美しい品々が生み出されると信じていた。

本論は、ウィリアム・モ里斯の労働観について検討をおこない、かれの考えがどれほど現代のデザイン実践において通用するのかを見極めたい。たしかに、現代のデザインにおいては、製品の仕上がりもさることながら、製品の生産にかかわる労働者の労働のありかたが問われており、モ里斯の志向はたしかに現代のデザインに通じるところはあるだろう。しかしそれが一九世紀の時代のままに通用するともかぎらない。そこで、次の変化について注目したい。第一に、モ里斯は職人とともに生活を彩る品々を生み出そうとしたならば、現代のデザイナーは、市民とともに生活を豊かにするあらゆる事物を生み出そうとする。第二に、モ里斯が気にかけていたのは人々の労働であったが、現代のデザイナーは、労働というよりも参加のありかたを気にかける。第三に、モ里斯の時代のデザイナーの仕事がおもに装飾を描き出すことだったならば、現代のデザイナーはむしろ人々が自分で何かを生み出すため機会を考える。

発表2

大正期日本の「労働における芸術」を考える ウィリアム・モリスと石田伝吉の比較を通して 佐藤 蓮（高知大学大学院修士課程）

本発表では、労働と芸術をめぐる、ウィリアム・モリスの言説と、大正期に社会教育家として活動した石田伝吉の言説との比較検討を行う。特に、モリス思想に触れていたはずの石田の労働観が、モリスとは異なり、人々の生活の充実というよりはむしろ国家による民衆の管理をより一層厳格にするものであった可能性について考えたい。ただし、石田伝吉という人物や彼の著作には慎重な判断が必要な部分が多い。この点については郡司美枝による石田伝吉論『理想の村を求めて』でも言及されている。

石田伝吉は、1927年に著した『地方青年の覚醒』の中で、農業とは芸術であり農業者は芸術家であると述べた。こうした一見モリスにも通ずるような彼の言葉は、当時の国策であった地方改良運動に根ざしている。つまり、日露戦争に勝利し、今や西欧列強と肩を並べた（と自認していた）近代日本において、地方の農村振興は国力の増強に必要不可欠なものであり、石田の活動はこのような国家プロジェクトと切り離せないものであったのである。

石田の1925年の著書『内外理想郷物語』は、『ユートピアだより』を含むいくつかのユートピア物語を抄録している。彼がモリスを認識していたことはもちろん、ユートピア思想にも造詣が深かったことが伺える。しかし、石田が唱えた「芸術としての農業」はその目的からいえばモリスの労働観とは似て非なるものである。たとえばE・P・トムソンが大著『ウィリアム・モリス』で語ったように、モリスが、利益を得るためにのみ生産や労働を行うことを非難したのに対して、石田のそれは日露戦争後に日本を待ち受けていた「経済戦争」への農民の貢献を要求するような労働観でもあったのである。

このように本発表では、モリスとの関係を意識しながら、大正期における労働と芸術に関する1つの言説の様相を明らかにする。またそれを通じて、モリスが考える労働の意義を改めて認識する契機としたい。

発表3

英国ガーデン・サバーブにみるコミュニティ・デザイン 「共同住宅」を例に

吉村典子（宮城学院女子大学）

「コミュニティ」の在り方や価値が見直されている昨今において、「共同」、「共同体」の議論も活性化している。その源流の一つとして、英國のオウエン (Robert Owen, 1771-1858)、ラスキン (John Ruskin, 1819-1900)、モ里斯 (William Morris, 1834-1896) 等もよく引き合いに出されている。住環境をめぐってのそれについては、ヒル (Octavia Hill, 1838-1912)、バーネット (Henrietta Octavia Weston Barnett, 1851-1936)、ハワード (Ebenezer Howard, 1850-1928) の流れが着目され、「ガーデン・サバーブ (田園郊外)」、「ガーデンシティ (田園都市)」という概念や実践が考察されている。本稿は、住環境におけるそれを検討するものであるが、その中でも特に「共同」ということが意識された「共同住宅」に着目する。

事例として取り上げるのは、バーネットによって提唱されたハムステッド・ガーデン・サバーブにある「ウォーターロー・コート (Waterlow Court, 1909)」である。職業をもつ自立した女性の単身者向け共同住宅としても着目に値するものであるが、ベラミー (Edward Bellamy, 1850-1898) やウェルズ (Herbert George Wells, 1866-1946) の小説の中でモティーフとなる「キッチンのない住宅」、即ち家事労働から解放された住宅の実践の最初期の例として挙げられるものである。但し、小説で描かれたそれとは似て非なるものである。その点を明らかにしつつ、英國 19 世紀から 20 世紀にかけての家事労働をめぐる構造と文化を参照しながら、その意図を解明したい。

また、間取りにおいても、当時の典型例と比較すれば、その革新性が浮かび上がる。設計は、スコット (Mackay Hugh Baillie Scott, 1865-1945) であるが、スコットの言説や実践例と照らし合わせると、彼が追究する住まいの姿と重なり合うのである。

これらの延長線上に、コモン・スペースがあるものと位置づけ、共同のダイニング・スペース、ラウンジ、通路、中庭、外周、それらを含めた全体デザインを考察し、ウォーターロー・コートにみる「共同住宅」としての在り方を明らかにする。

発表4

ヴィクトリア朝の芸術教育 その変容とアーツ・アンド・クラフツ運動の影響

横山千晶（慶應義塾大学）

1856年4月9日の労働者大学の教員評議会の議事録には、新たに「建築と土木工学」のクラスをボランティアで教えたいたいというエドワード・J・エリオット氏の申し出が議題となり、当時労働者大学で素描を教えていたラスキンの回答が記録されている。当日会に出席できなかったラスキンは、講師が「デザイン」に一切触れないと同意するのならこの申し出を受け入れてもよい、という意見を提出してきたのである。ラスキンの態度が断固としたものであったからだろう。結局エリオット氏の申し出を大学は断ったようだ。ラスキンが労働者大学で素描クラスを受け持つようになった大きな理由は、政府主導のデザイン学校が採用する「サウス・ケンジントン方式」に教育実践を通して反対の意を表明するためにあったことはよく知られている。しかし、時を経るにつれてこの対極は少しづつ近づいていく。ラスキンが嫌悪した国定指導要領の見直しが1870年代から図られていったのである。指導要領をめぐる議論はやがて、地方におけるデザイン学校のカリキュラムに自由裁量を認める道を切り開いていった。そしてカリキュラムの見直しの中でアーツ・アンド・クラフツ運動をけん引した芸術家たちが教育に密にかかわっていくようになる。時を同じくして労働者大学でも1870年には「水彩画、装飾と遠近法のクラス」が開講され、翌年には「装飾と建築」の素描クラスを提供するようになる。やがて、労働者大学の素描クラスは、1877年10月から科学・芸術省が提供する試験に参加することが発表された。これは1856年に建築のデザイン教育を固く拒否したラスキンの考え方からの乖離ではなく、むしろ両者の歩み寄りの現れと取ることができよう。本発表では、1870年代の官立デザイン学校のカリキュラムをめぐる議論と、その中で生まれた新しいデザイン教育を、Manchester Municipal School of Artを中心に見ていくと同時に、新しいデザイン学校の教育が、ラスキンのその後の素描教育にも与えた影響を考察する。

発表5

モリスはシェリーをどう読んだのか？

関良子（三重大学）

ウィリアム・モリスは革命派のロマン主義詩人パーシー・ビッショ・シェリーの詩をどのように読んだのだろうか？本発表ではこの素朴な疑問を検討したい。

モリス自身がエッセイ・講演・私信の中でシェリーに触れていることはあまりない。しかし、19世紀後期のコンテクストに照らして考えると、モリスと彼の周辺にいた人々にとって、シェリーは「一世代前の詩人のひとり」にはとどまらない存在であったように思えるのだ。

P.B. シェリー（1792-1822）は、ロマン主義詩人の中でもとりわけ過激な詩や論考を書き残したこと、およびスキャンダラスな私生活が、ヴィクトリア朝倫理にそぐわないという理由で、死後しばらくは等閑視される時期が続いたが、1880年頃から様々な読み直し（あるいは読みかえ）が行なわれるようになった。その一つが、シェリーの詩や論考の中に社会主義の思想を見出す試みであった。中でも象徴的なのが、エリノア・マルクスとエドワード・アヴェリングによる論考「シェリーの社会主義」（1888年）である。また、モリスと親交の深かったジョージ・バーナード・ショーには、シェリーを真似て菜食主義者になるほど、彼の思想に心酔した時期があった。さらには、ケルムスコット・プレスから刊行された書物全53点のうち、「現代」詩人の作品は数少ないものの、その中にあって1894～95年に『シェリー詩集』が全3巻で刊行されたという事実もまた、シェリーがモリスらにとって特別な詩人であったことを示唆しているように思われる。

モリス自身がシェリーについて語った言葉があまり残っていないため、推測の域を出ないところもあるが、本発表ではこうした19世紀後期のコンテクストを再構築することで、モリスらのグループの中でシェリーがどのように受容されたかを考察する。

発表6

寿岳文章のウィリアム・モリス研究

川端康雄（日本女子大学名誉教授）

著述家、英文学者、書誌学者、和紙研究家、民藝運動家と、多くの分野で重要な仕事を果たした寿岳文章(1900-92)については、1933（昭和8）年から没するまで60年近くにわたって本拠とした京都府向日市の家「向日庵(こうじつあん)」が有志(NPO 法人「向日庵」)の働きかけによって保存され、彼の家族（妻の静子、娘の章子、息子の潤）の業績と併せて、その事績が顕彰されている。ウィリアム・モリスとの関係についても、研究者としてのみならず、ケルムスコット・プレスに部分的に触発されたと思われる私家版「向日庵本」の制作者としても、さらに調査研究が進められることが期待される。

寿岳の一連のモリス論のなかで、おそらくもっとも知られているのは、1934(昭和9)年に『英語青年』に発表した「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」であろう。これは工芸家としてのモリスが英国のみならず日本にまで与えた影響を称えながらも、宗教的な深さを併せ持つ柳の工藝論を高く評価しており、逆にモリスについてはそうした深みが欠けるとして批判的である。だがそれから20年後、向日庵に保存されている寿岳の未刊の読書ノート「獺祭記」の1954(昭和29)年3月の記載には、「モリスが今日存在、生きてゐるのは、彼の眼が社會の構成に向つて開かれてゐたからだ。その点で少しも開眼しない柳宗悦は駄目だと思ふ」と綴っていて、モリスと柳への寿岳の評価が逆転している。このコメントを手掛かりとして、柳と民藝運動、そしてモリスに対する寿岳のスタンスの変化について考えてみたい。